［特別講演Ⅰ］

佐賀藩医 相良知安とドイツ医学

相良　隆弘

佐賀県白石町立六角小学校／知安より五代目の子孫

私は相良知安から数えて5代目の子孫で，相良家は江戸時代から外科中心の藩医の家系です．知安は天保7年（1836）佐賀城下八戸村に，藩医相良柳庵長美の三男として生まれる．江藤新平は，知安と同じ八戸村出身の竹馬の友で2歳上の先輩に当たる．嘉永4年（1851）16歳で藩校弘道館内生寮に入学．この年に佐賀藩は蘭学寮を設置し，医学館が医学寮となり蘭学寮を併設する．同年さらに「佐賀藩医業免札姓名簿」を制定し，我が国最初の医師免許試験制度を発足させた．

佐賀藩は弘道館生徒の中から優秀な人材を，蘭学寮へ入学させた．知安もその一人として蘭学寮に進み，創設されたばかりの医学寮へ入学する．安政5年（1858）医学寮は，「好生館」となる．

「佐賀の七賢人」の大隈重信や副島種臣・江藤新平らも，弘道館の親友として知安と共に学んだ．弘道館の漢学や蘭学寮でオランダ語を学ぶことより，医学寮で学問することが知安を刺激したようで，後年手記のなかで「弘道館では，退学させられない程度に勉強した」と述懐している．藩主鍋島直正は，文武奨励と質素倹約を宣言し，藩政改革と石炭や陶磁器などの海外貿易を推進する．直正は藩政改革の一環として藩医の世禄を削減する．多感な知安は，父柳庵の減給が腹立たしくてなりませんでした．当時は一般に医師，特に外科医は地位が低かったのです．知安が，後年ドイツ医学導入と医学校創設及び「医制草案85ヶ条」に情熱をかけたのは，この体験（いわゆる藩医の地位の低さと待遇の悪さ）から，医師の地位向上を図りたかったのです．明治に入り知安が，医学校創設に際し，医師を官僚らより上位の職位に位置づけたいと強く願っていたのです．文化5年（1808）のフェートン号事件以来，外国と対抗できる軍事力の増強には教育刷新による人材育成が急務とされた．

文久元年（1861）知安は，直正の信頼も厚く26歳で江戸遊学を命じられ，下総佐倉の佐倉順天堂塾の門下に入り，創始者の佐藤泰然の養子佐藤尚中に師事した．

順天堂塾で2年学んだ知安は，門下の秀才33名のトップにあげられ塾頭として頭角を現した．当時の佐倉順天堂は，大阪の緒方洪庵が主宰する適々斎塾と並んで，民間蘭学塾の雄として多くの俊才を輩出した．同門には，後に知安と共に医学制度改革を遂行した福井藩の岩佐純や長谷川泰，司馬凌海，佐々木東洋など全国各地から集った英俊が学を競っていた．

文久3年（1863）に知安は長崎遊学を命ぜられ，恩師の佐藤尚中の紹介状を携えて幕府の医育機関である長崎「精得館」（現在の長崎大学医学部の前身）で，オランダの名医ボードウイン（1820–1885年）と出会う．ボードウインから蘭医学を学び研鑽を積んだ知安は，その学才を認められ戸塚文海の後任として館長に就任する．当時蘭医学書のほとんどは，ドイツの医学原書をオランダ語に翻訳したものだった．事実，19世紀後半の基礎医学ではドイツ医学の進歩はめざましく，知安がそれを学びたいと思ったのも当然といえよう．ボードウインは知安の才を惜しみ，幾度もオランダのユトレヒト大学への留学を勧めたが，知安は父柳庵の老弱を理由にこれを辞した．

慶応元（1865）年佐賀藩は，長崎に開設した英学校「致遠館」教師にアメリカ国籍の宣教師フルベッキを迎え，知安や大隈重信，副島種臣，小出千之助，中野健明ら佐賀藩士を入学させた．フルベッキ（1830–1898年）は，大隈や副島・知安らにアメリカ憲法や聖書などを英語で講義した．慶応3年に帰郷した知安は，藩主直正の侍医兼好生館教導方差次（准教授）となる．慶応4年（1868）正月直正に従い上京し，明治維新を迎える．当時の医学の流れは，漢方からオランダ医学へ進み，さらにイギリス医学へ

の流れが今急になっていた.

明治2年（1869）1月に明治新政府から知安へ,「医学校取調御用掛り被仰付候事　行政官」との辞令が下りる. 知安と順天堂塾で学友であった福井藩医岩佐純と共に, 新生日本の医学校創設に尽力せよというものであった. 知安と岩佐純は徴士となり, 大学小丞からさらに大学大丞へと任命される. 知安は主に学校を岩佐は病院を掌り, 大学東校（医学校兼病院）の改革に当たる.

戊辰戦争（1868年）で傷病兵の治療に活躍したイギリス人医師ウイリスへの恩義から, 新政府内の西郷隆盛や山内容堂などは, 将来イギリス医学を日本医学の規範にすることを決めていた. しかし知安は, ドイツ医学こそ世界最高水準であり, 日本のとるべきはドイツ医学と強く主張した. この根拠として, ①オランダ医学書は, ドイツ医学書の翻訳が大半で, 当時のドイツ医学は基礎医学で世界的発見が相次ぎ発展していた, ②致遠館時代の恩師フルベッキ（大学南校学監）の「ドイツ医学が世界に冠たるもので日本はドイツを範とすべき」との証言, ③日本とドイツは, 国情・民族性などに類似性がある等があげられる. 明治2年（1869）年松平慶永（春嶽, 福井藩主）が, 大学別当（長官職）に任命された. 同時に知安と岩佐は, 大学東校（現在の東大医学部の前身）の管理者である大学権大丞に就任し, いよいよ活躍を始める.

また運良く二人の順天堂時代の恩師佐藤尚中が, 大学大博士に就任し教授の最高位に就いた. まず知安は文教の責任者で大学知学事の山内容堂を訪問し, ドイツ医学採用を強く建議した. 新政府内部では, イギリス医学採用を決定したも同然であり, イギリス派の容堂もその事情を高圧的に説明し, 知安の建議を退けようとした. また老獪なイギリス外交官パークスは, 薩摩藩・長州藩・土佐藩に近づき次第に発言力を増して, ドイツ医学を主張する知安に対し, 策を弄して圧力をかけ懐柔しようとした. しかし知安の断固とした信念にはとうとう勝てなかった.

知安は, 回想記である「祭之記」のなかで,「西洋大学ノ盛ナルモノハ独乙ナリ, 英仏ハ百害アッテ利ナシ, 蘭ハ小国ニ哀ルノミ, 蘭英ヲ排シテ独ヲ採ルベシ」とドイツ医学への強い信念を述べている.

そこで政府首脳は, 明治2年知安と岩佐を呼び医学採用の意見を聞くことにした. 信念を貫徹し妥協を知らない性格の知安は, 三条実美太政大臣はじめ, 岩倉具実, 木戸孝允, 大久保利通, 後藤象二郎, 松平春嶽, 秋月種樹, 鍋島直正ら政府要人の廟議の席で堂々と自説を主張した.

まず知安は, イギリス人医師ウイリスを雇用し医学校総教師に取り立てるとの約束が, 医学校取調御用掛の下命を受けた自分に何の相談もなく, 山内容堂知学事の一存で約定されているのは, 正式な廟議の手続を経ない私事であることを論破した. この知安の正論に対し, 容堂はじめ誰も反論できず激論は知安の勝利に終わる. 四面楚歌で不利な状況であったが, 知安の精力的な運動と信念にやがてフルベッキに親しい政府要人や, 同郷で佐賀藩出身の大蔵大輔兼民部大輔の大隈重信, 議定の鍋島直正と参議の副島種臣, 会計官判事の江藤新平らも同調するようになり, 次第に政府部内の空気も知安に有利となり, 太政官は, ついにドイツ医学採用を正式に決定した. これが契機となり山内容堂は免職となる.

知安の尽力によりドイツ医学採用が決定したが, このことがイギリス医学派の旧土佐藩閥から不満を買い, にらまれることとなる. そして明治3年（1870）年知安の部下に不祥事があるとの嫌疑がかかり, 突然弾正台に捕らわれ投獄された. その後裁判で冤罪が判明し無実が晴れ1年2か月ぶりに復帰した.

捕らわれた時知安は, 太政官へ建議する建白書を持参していた. 建白書では, 医及び医師の名称を廃止して護健と改め, 医師を護健使（クスシ）と称すべきだと訴えた. 新生日本の医学は, 疾病予防・健康増進に進まねばならないと, 予防医学・健康保護を強調したのだ.

明治5年（1872）の学制発布により大学東校が, 第一大学区医学校（現在の東京大学医学部の前身）と改称され初代校長に就任し, 明治6年（1873）には文部省初代医務局長兼築造局長を歴任した. 医務局長時代に知安は, ドイツ医学制度を参考に我が国の近代医学制度の基礎となる, 医制85ケ条からなる

「医制略則」を起草する．この貴重な資料は，佐賀県立図書館の「相良知安関係資料」（108点）のなかに保存されていて閲覧できる．この医制草案は明治7年（1874）年，二代目医務局長の長与専斎（大村藩出身）に引継がれ，ほぼ知安の原案どおり「医制」（76ヶ条）が公布された．

政府はドイツ医学採用に伴い，大学東校にドイツ人医学教師を招聘する．いわゆる政府お雇い外国人教師である．明治4年（1871）ドイツ人医師のミュルレル（外科）とホフマン（内科）の両名が来日し，大学東校でドイツ医学教育がスタートした．2名の来日が普佛戦争の勃発で遅延するが，多数の学生が外人教師の講義を希望したため，知安は帰国前の恩師ボードインを横浜へ訪ね，3か月足らずだが講義をしてもらった．残された問題はイギリス人医師のウイリスの処遇であった．ウイリスは，知安や西郷隆盛・江藤新平・大久保利通の尽力で鹿児島へ招聘されて，医学校兼病院を興し医学教育に専念した．

彼の門下からは，高木兼寛や池田謙斎などを輩出した．話は戻るが新しい医学校を東京市上野に建設したいと考えた知安は，恩師のボードウインと相談し一旦は決定していたが，下見したボードウインはその照葉樹林のすばらしさに公園として残すように進言し，その代替地として赤門で有名な旧加賀藩江戸屋敷跡（現在の東大本郷キャンパス）に新医学校建設が決定した．明治10年には11名のドイツ人教師が滞日したが，中でもベルツ（内科）とスクリバ（外科）は滞日が20年以上に及び，東京帝国大学の双璧とされた．両名の胸像が東京大学医学部構内に建立された．

しかし明治6年（1873）に知安へ突然，第一大学区医学校校長と文部省医務局長兼築造局長罷免辞令が下りる．失脚した理由は私見だが，①知安がドイツ医学導入を強力に推進し採用したので，そのためイギリス派の土佐・薩摩藩出身官僚らの恨みを買ったこと，②「明治6年の政変」（征韓論争）で下野した親友の江藤新平を知安が支持したことを口実に，政府の反発を受けたのではないかと推測される．その後の知安は文部省内の閑職で過ごし，明治18年文部省御用掛として編輯局勤務を最後に，一切の官職から退いた．知安の全盛期はわずか5年余りであった．退官後の知安は，住居を転々とし東京市浅草区元鳥越町，本郷区本郷真砂町，芝区神明町など長屋住まいで，医師を捨て権妻と暮らしながら易者として生活の糧を得ていた．晩年は知安を訪ねる人も少なく，親友の石黒忠悳（陸軍軍医総監・枢密院顧問官）が，変わらぬ友情を示し援助を申し出ている．副島種臣や北里柴三郎博士・後藤新平らも近況を聞き慰問している．

明治3年（1870）年政府は，第1回国費留学生をドイツに派遣した．この9名の留学生の内の一人が，知安の弟の相良元貞である．元貞は，佐賀藩医学校から佐倉順天堂塾で佐藤尚中から蘭医学を学び，会頭を務め「ヒルトル解剖書」等を講義した．その後大学東校中助教兼大寮長に就任．5年間留学したベルリン大学で病理学博士号を取得する．しかし病を患い入院した元貞を，ライプチヒ大学病院で献身的に診察したのがベルツ博士である．ベルツ博士の評判を聞いた明治政府は，これが契機となり明治10年にお雇い外国人医師として我が国へ招聘し，東京大学医学部へ着任した．

これ以後ドイツに留学した北里柴三郎博士・志賀潔博士・秦佐八郎博士ら医学者達は，細菌学・免疫学の基礎医学で数々の世界的な発見や業績を挙げ，明治後期には日本医学が世界レベルまでに到達した．

医政家として稀代の才と実行力を発揮しながら，不遇な晩年を過ごした知安へ吉報が届く．明治33年3月宮内省から，我が国医学制度確立の功績により勲五等双光旭日章授与の通知が届いた．これには石黒博士や田中宮相，岩佐純，池田謙斎，三宅秀，大沢謙二ら医学旧友らが奔走し尽力した結果であった．

「西の長崎，東の佐倉」と呼ばれる我が国蘭医学の発祥地のその両方で，蘭医学を学び活躍した知安は，近代医学黎明期に日本医学近代化の主導的役割を担った先覚者と言えよう．明治39年（1906）年6月知安は，インフルエンザを患い71歳の生涯を閉じた．

昭和10年（1935）に「相良知安先生記念碑」が，知安が医学校建設を構想していた上野公園を見渡せる，東京帝国大学医学部構内の池之端門側に建立された．在京の佐賀県出身者・石黒博士・長与東大総

長・入澤名誉教授・女医の吉岡弥生ら百余名の発起人が，全国の医師等から寄附金を募り建立された．墓所は城雲院（佐賀市唐人2丁目）に眠る．平成19年（2007）年記念碑は「東大医学部・附属病院創立150周年記念」事業として，東大附属病院入院棟玄関前の陽の当たる緑の場所に移転された．

相良知安（1836–1906）

相良知安墓所（『城雲院』佐賀市唐人2丁目）